

社会科固有の「読解力」形成のための授業構成と実践分析(Ⅶ)

— 第3学年単元「酒米の王様 山田錦のひみつ」の場合 —

Development and Analysis of Social Studies Lesson for Promoting the Reading Literacy of Society (Ⅶ) : in the case of “The Secrets of YAMADANISHIKI (King of Brewing Rice)” in the 3rd Grade

關 浩和* 原田 智仁* 吉水 裕也* 米田 豊* 森 清成**
SEKI Hirokazu HARADA Tomohito YOSHIMIZU Hiroya KOMEDA Yutaka MORI Kiyonari
重枝 孝明** 土松 拓生** 井元 康行*** 小寺 研****
SHIGEEDA Takaaki TSUCHIMATSU Takuo IMOTO Yasuyuki KODERA Kei

本研究は、社会科授業の開発と分析を通して、「社会科固有の読解力」とは何かを解明しようとするものである。本研究を始めるにあたり、「社会科固有の読解力」について、次の仮説を立てている。

- (1) 社会科固有の読解力は、対象に即した科学的理論をベースにして形成される。
- (2) 社会科固有の読解力は、専心的な体験・表現活動ではなく、分析的な探究活動を通して形成される。
- (3) 社会科固有の読解力により形成される認識は、主観的知識の増殖ではなく、客観的知識の成長である。

上記の仮説に基づき、第7年次となる今年度は、第3学年単元「酒米の王様 山田錦のひみつ」の開発・実践を行った。食用としてのうるち米ではなく、酒米である山田錦を設定し、「なぜ、山田錦をつくっているのか」を主発問に、子どもの経験を引き出した後、根拠を明確にした読解を経て、現実生活につなげる読解を試みた。その結果、単元構成には問題はあつたものの、教師の期待する読解にはほぼ成功した。

キーワード：小学校社会科，地域学習，読解力，資料活用，山田錦

1 問題の所在

本研究は、社会科固有の読解力形成のあり方を探るものである。大学と附属学校の連携による社会科授業研究は、テーマを「社会科固有の読解力形成のための授業構成と実践分析」として進めている。昨年度は、第4学年単元「天空の城(竹田城)のあるまち・朝来市」において、読解力形成過程について、客観的な知識の成長を評価するために、中心教材として「天空の城(竹田城)」を取り上げ、安全性や自然保護、景観保護、費用などの視点から迫った。

昨年度の研究成果として、大きく次の三点が挙げられる。第一は、竹田城という話題性に富む事例を取り上げて、まちづくりのための多様な主体(アクター)の取り組みを学ぶことができた点である。だが、最終的には公・共・商が互いに協力しているという常識レベルの認識に留まった。むしろ社会的役割の視点から、それぞれの取り組みの<意味>に注目させる必要があつたといえよう。第二は、多数の観光客の来訪を願うはずの朝来市が、「なぜ竹田城の観覧料を取り始めたのか?」という主発問を設定した点である。そこには授業者の教材構成の巧みさがある。予想通り、安全性や文化財の保護とコストの関係をめぐり子どもたちは活発に追究し、学級全体として複数の立場での思考や仮説設定による情報の解釈という点で読解力形成に成功した。ただし、推論の省察に

は失敗した。今後は全て子ども任せにするのではなく、意図的に省察を促す手立てが必要であろう。第三は、県の学習の延長上に、まちづくりを位置付けた点である。県の様子の学習だけでは、子どもたちの住む地域と県との関係認識は単なる地理的、機能的関係に留まる。そこにまちづくりの視点を加えると、他地域の事例が自分の町の問題となるだけでなく、子どもたちに社会参加の意識を育むことにもなってくる。その点で、本実践は部分的には優れていたが、単元全体におけるまちづくりの位置付けに課題が残った。

そこで、今年度は、昨年度の反省を踏まえて、これまでの研究成果を活かせるように、第3学年単元「酒米の王様 山田錦のひみつ」を取り上げ、読解力形成過程において、客観的な知識の成長を評価するために、次の手順で研究に取り組むことにした。

- ①「酒米の王様 山田錦のひみつ」の単元を設定し、経験を引き出す段階、根拠を明確にする段階、現実生活につなげる段階を設定し、単元構成を共同で立案する。
- ②本研究の中心教材として、酒米の王様・山田錦を取り上げ、資料を収集する。
- ③授業実践の過程は、子どもの読解の過程がたどれるように、子ども自身の考えを表現させ、ワークシート(授業記録)をポートフォリオ的に保存する。
- ④教師は、プリント配布資料の読み解き過程と子どもの

*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻 **兵庫教育大学附属小学校 ***兵庫教育大学附属中学校

****姫路市立広畑第二小学校

ワークシートを質と量の両面から分析し、読解の成長過程を把握し、評価する。

- ⑤読解力形成のための授業構成を評価し、次の実践に活かせるようにする。

(關 浩和)

2 授業構成のねらいと実際

2.1 教材解釈

本単元のねらいは、「一次生産者は、二次生産者や生活者との信頼関係を大切に、気候・地形・土壌などの地域の特性を活かし、質の高い品物をつくるために様々な方略を講じていることがわかる」である。

本単元以前に、二つの学習を実施した。まず、「お店の工夫をみつけよう」では、「販売者が様々な工夫を行っているのは、生活者の多様なニーズに合わせることで、利益をあげられるようにしていること」について学んだ。また、「K農園の農作物の工夫をみつけよう」では、「農家の人たちが様々な工夫をしているのは、生活者のニーズに寄り添い、品質が良く安心安全な商品をつくるためであること」を学んだ。これらの学習から、私たちの身近な店の販売者や、農家などの生産者は、生活者のニーズに合わせた工夫をしていることを把握した。しかし、まだ、販売者や農家を事例の一つとしてしか捉えていないため、次の段階として、様々な農家がつくった作物が加工されたり販売されたりする際の関係性を見出すことで、学んだ価値をより概念化することが必要であると考えた。

そこで、酒米としてのブランド力と長い歴史をもち、かつ加東市や三木市またその周辺の地域に根差して栽培されている「山田錦」を取り上げる。山田錦は、「酒米の王様」と呼ばれており、全国の酒蔵から多くの需要がある。その中でも加東市、三木市の山田錦は、特別に品質が良く、「国内一位」の出荷量となっている。加東市、三木市の山田錦が、国内一位の出荷量となっている要因は二つ挙げられる。一つ目は、自然的環境である。具体的には、加東市や三木市での夏の朝夕の気温差が10℃以上になることや、平野であるために水の確保がしやすく稲作に適していること、粘土質の土壌によって、保水力が良く栄養も保持しやすいことが挙げられる。

そして、二つ目は、社会的環境である。兵庫県の南部には昔から灘五郷という酒処が存在し、何百年もの間、酒蔵と酒米農家がつながって酒造を行ってきた歴史がある。つまり、酒蔵と酒米農家との信頼関係と、長い間かけて培われ伝承されてきた技術がある。その技術をもって質のよい酒米を加工し、多くの生活者が求める日本酒を造り続けてきた。その価値は今や日本国内に限らず、世界にも知れ渡っており、ノーベル賞晩餐会でも振る舞われるほどである。

このように、山田錦は、農家の様々な工夫や努力だけでなく、加東市・三木市における歴史や風土、さらには、農家と酒造業者、酒造業者と生活者、それぞれの関係性について学ぶことができる多様性をもった教材である。

また、子どもにとって身近な通学路で目にする田んぼでつくっているものが食べるためではなく、お酒をつくるためだけに使われる米であることから、意外性のある学習問題が生まれやすくなると考えられる。そして、山田錦について学習する意義として、酒米山田錦が一次生産者から製品となって生活者に渡るまで、一貫する人々の考え方を捉えることで、社会の法則性を見出すことができるのではないかと考える。

本単元の学習を展開するにあたって、次のことを大切にしたい。山田錦を一次生産者（農家）、二次生産者（酒蔵）、販売者、生活者の様々な視点から捉えていくことによって、それぞれに携わる人々の具体的な工夫や努力を学んでいけるようにする。その思いや考え方の中で一貫する考え方を抽出することで、社会の法則性が見出されるのではないかと。つまり、「品質のよいものを求める生活者とそれに応えようとする販売者、生産者の関係」を明らかにすることである。そして、子どもにとってより身近な問題にしていくために酒米山田錦を炊いて食べてみたり、酒米山田錦を使用したお菓子を試食してみたりして、生活者としての人々は、どんなことを求めるのかということに気付けるようにする。さらに、三木市で開催された「山田錦まつり」で山田錦について調べたことをポスターにまとめて掲示することを目的として学習を進めていく。学習のまとめの段階で、「生産者と販売者と生活者の関係が成り立っているのは、山田錦製品のときだけかな？」と問うことで、子どもたちの身近な商品にもその法則性があることに考えが及ぶようにした。これらが現実社会とつなげる働きかけとなると考えたからである。

2.2 単元の指導

単元名 「酒米の王様 山田錦のひみつ」

2.2.1 目標

- 山田錦が「酒米の王様」といわれる理由を追究していく中で問いを発見し、それに対する予想や考えを、学習経験をもとに書いたり話したりして表現している。

【社会的な思考・判断・表現】

- 山田錦の価格、生産地、輸送地、生産量や輸血量などの資料から、必要な情報を読み取ったり絵や文を使ったりして、効果的にまとめることができる。

【観察・資料活用の技能】

- 一次生産者は、二次生産者や生活者との信頼関係を大切に、気候・地形・土壌等の地域の特性を活かし、質の高い品物をつくっていることが理解できる。

【社会事象についての知識・理解】

2.2.2 単元計画（次頁に掲載）

2.3 授業の実際

2.3.1 第一次 問題設定 ～経験を引き出す～

第1時では学校の周りを俯瞰した地図を提示して、田んぼが多いことに気付けるように働きかける。そして、「田んぼでは育てられているものは何だろう」という問いを投げかけると、33人中5人は「食べるお米」、25人は「お酒をつくるお米」、残りの3人は「小麦や野菜な

2.2.2 単元計画 (全14時間) 学習問題 ○ 1時間 ◎ 2時間 ● 3時間

	学 習 活 動	教師の働きかけ	評価の視点
<p>第一次 問題設定</p> <p>2時間</p>	<p>○加東市周辺の地図資料から、ほとんどの水田で山田錦をつくっている事実を知る。</p> <p>○山田錦はどのような米なのか、調べてきたことを交流する。</p>	<p>・のぼりや加東市の山田錦生産の分布に関する資料から、山田錦について興味をもてるようにする。</p> <p>・家庭で山田錦について調べるよう促す。</p> <p>・なぜ、「酒米の王様」言われているのか問うことで、その理由を追究するように促す。</p>	<p>・地図資料から、加東市の田んぼでほとんど山田錦をつくっていることを読み取っている。</p> <p>・山田錦について自分なりに調べてきたことを発表している。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">酒米の王様山田錦のひみつをさぐろう。</div>			
<p>第二次 問題の追究</p> <p>9時間</p>	<p>○山田錦の郷に行く計画を立てる。</p> <p>◎山田錦の郷に行って調べる。</p> <p>○見学・調査に行つてわかったことをまとめ、さらに疑問をもつ。</p> <p>○山田錦はつくるのが難しいのに、なぜたくさん農家の人たちがつくっているのか考え交流する。(価格と品質)</p> <p>【本時】</p> <p>○兵庫県内では多くが食用米をつくっているのに、なぜ加東市や三木市と周辺の地域だけが山田錦をつくっているのか考え交流する。(場所[気候・地形・土壌]と品質)</p> <p>◎食用米と酒米の価格が同じ時代もあったのに、なぜ農家の人たちは山田錦をつくり続けたか考える。(信頼)</p> <p>○Kさんの山田錦づくりについての話を聞く。(安心)</p>	<p>・子どもたちの疑問を整理することで質問を厳選できるようにする。</p> <p>・うるち米と酒米の食べ比べの場を設定することで、酒米の特色を思い出せるようにする。</p> <p>・既知と事実の差異をまとめることで疑問をもてるようにする。</p> <p>・山田錦農家の苦勞を映像資料によって示すことで、なぜつくるのが難しい酒米を育てるのか疑問をもてるようにする。</p> <p>・酒蔵へのインタビュー映像と、品質のよい山田錦ができる条件に関する資料から、酒造りには粒と心白が大きい酒米が必要であることを理解できるようにする。</p> <p>・日本一の酒造地である灘との関係がわかる資料から、酒米づくりの歴史の深さに気付けるようにする。</p> <p>・Kさんの酒米山田錦づくりを聞くことで、酒蔵との提携について多面的に捉えられるようにする。</p>	<p>・見学したことについて、絵や文を使って効果的にまとめている。</p> <p>・食用米と酒米の価格表から、価格の違いについて読み取っている。</p> <p>・気候、地形、土壌が品質の良い酒米をつくるために必要な条件であることがわかっている。</p> <p>・一次生産者と二次生産者との信頼関係が生産の質を高めることに気付いている。</p> <p>・Kさんの話を聞き、ワークシートにまとめている。</p>
<p>第三次 一般化</p> <p>3時間</p>	<p>●「山田錦まつり」において「酒米の王様」山田錦をポスター、ちらしなどでPRする。</p> <p>・山田錦を使った加工製品 山田錦ロール(加東)・酒まんじゅう(小野)・冷製山田錦うどんセット(多可)・山田錦ジェラート(三木)</p> <p>・世界に広がる山田錦を使った日本酒 ニューヨークで人気の日本酒「獺祭」・ノーベル賞授賞式晩餐会での日本酒「福寿」</p>	<p>・山田錦がいろいろな商品に活用されていることに気付けるよう促すことで、商業作戦と生産とのつながりを考えられるようにする。</p> <p>・日本酒の輸出量を示すグラフから、世界で日本酒が人気であることを知り、山田錦の需要が増してきていることに気付けるようにする。</p> <p>・生産者と販売者と生活者の関係が成り立っているのは、山田錦製品のときだけかという問いを投げかけ、一般化できるように働きかける。</p>	<p>・山田錦をPRするための方法を自分たちで選択し、情報を集め、まとめて表現している。</p> <p>・他の製品に対しても生産者と販売者と生活者はより良いものを追究するということがわかる。</p>

どの別の作物」という認識であった。そこで、「なぜそう思ったのか」という発問によって、「家庭で酒米を育てている」という子どもや、「のぼりが立っているのを見たことがある」という子どもの経験が明らかになった。

その後、JAや酒蔵ののぼりの写真(写真1, 写真2)を提示すると、「見たことがある」という子どもがほとんどであり、興味を示した。そこで、「こののぼりは何のためにあるのかな」という発問を投げかけると、「目立つように」、「宣伝のため」、「有名にするため」、「目印にするため」などの予想が出てきた。

そこから、教師は「何を宣伝しているの」という質問で切り返した。すると、子どもたちは、のぼりに記載してある「山田錦」という文字に興味を示した。そこで、山田錦について家庭で調べることを課題として、次時へつなげた。

第2時では、山田錦について家庭で調べてきたことを交流した。その中で、山田錦は、食べるお米よりも稲の背が高く、米の粒が大きいことが特徴であり、台風など



写真1 JAののぼり(森撮影)

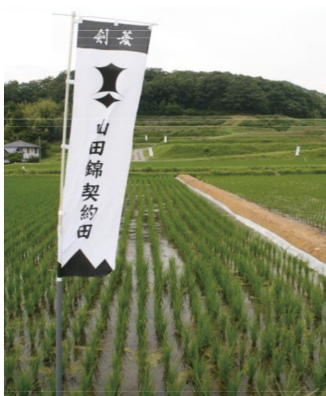


写真2 酒蔵ののぼり(森撮影)

により、すぐに倒れてしまう恐れがあることがわかる。お米の粒が大きいことがおいしいお酒づくりに深く関わっており、日本中の酒蔵が山田錦を使ったお酒をつくりだっていることや、山田錦が酒米の王様と呼ばれている事実を把握する。そして、その酒米の王様山田錦を全国一生産している地域が、三木市であることもわかる。それに付随して、加東市も山田錦をつくるのに適しているということをつきとめたが、なぜ山田錦がそんなにも酒蔵から求められているのか、なぜ三木市や加東市が山田錦づくりに適しているのかがわからなかった。そ

こで、『酒米の王様山田錦のみみつをさぐろう』という問題を設定することができた。

2.3.2 第二次 問題の追究 ～根拠を明確にする～

「酒米の王様山田錦のみみつをさぐろう」という追究問題を設定することによって、子どもは、自らさらに調べ学習を進める。実際に家から食用米と酒米(山田錦)の粒を持参し比較したり、山田錦を育てている家族にインタビューをしてノートにまとめてきたりし、追究の意欲を高めていく。その過程で、三木市にある「山田錦の館」に行き、酒米の王様山田錦がなぜ王様と呼ばれるのかについて質問したり、食用米と酒米(山田錦)を食べ比べどちらがおいしいか調べたりし、子ども全員が同じ学習経験をすることで、後の話し合い活動において根拠を共有できるようにした。

また、酒米の王様山田錦は、三木市や加東市など近隣の田んぼでしか栽培されていないことを知り、三木市と加東市が特別な地域であるという事実を把握する。そのような学習経験をした上で、本時の授業を行う。

本時において特に意識したのは、多角的な予想が立てられる学習問題となることと、根拠となる資料を価格数値にすることである。後者について説明を加えると、お金は、子どもにとっても身近で、経験とつなげながら、資料を根拠として思考できるのではないかと仮定したからである。以下、本時(第2次第5時)の交流場面におけるTC記録(一部抜粋)及びそれに対する分析結果を示す(表1参照)。

そして、次時において、「山田錦は育てにくいのに、なぜ多くの人が育てているのだろうか」に対する子どもの他の予想を追究する。「地形が作りやすいのではないか」、「環境が適しているのではないか」という予想に対して、映像資料などを用いて、検証していく。また、「海外へ売するため」、「世界へ売するため」に多くの人がつくっているという予想を考える際に、生産量の推移のグラフを提示し、生産量はどんどん減ってきていることに気付かせる。すると、新たな問い「なぜ酒米の王様山田錦の生産量は減ってきているのだろうか」が生まれる。そこで、生まれた予想が「作る人が高齢化しているから」、「むずかしいから」、「田んぼが建物に変わっているから」などの予想が出る。そして、農家の変移の資料から「作る人が減ってきている」という事実を把握する。そこで、山田錦農家の人から山田錦に対する思いを聞いたり、質問したりする中から、子どもたちの意識の中に「山田錦を広めて、農家の人を増やしたい」という気持ちが表れた。

2.3.3 第三次 一般化 ～現実社会につなげる～

子どもは、「山田錦をPRして広めたい」という思いが出てきたことで、毎年、三木市の山田錦の郷で開催されている「山田錦まつり」で山田錦をPRするポスターを作り掲示してもらうことになる。子どもは、これまでに学習してきた山田錦の知識をポスターにまとめていく。また、山田錦まつりで掲示された自分たちのポスターを見に行った子どもも多く、この活動が現実社会とつなげ

表1 本時の交流場面におけるTC記録とその分析

TC (T:教師 C:子ども) 記録	記録の分析
<p>T: では、新しくわかったぞっていう人発表できる人いますか。では、立って下さい。</p> <p>C1: 避けられないことがある。</p> <p>T: つなげていいよ。</p> <p>C2: はい、私は…刈り取った後は、あとのお米の水分は細かく決められている。</p> <p>C3: たおれたりしたらどうしようもない。</p> <p>C4: 売れなくなる。</p> <p>C5: 山田錦はとても栽培が難しい。</p> <p>T: 育てるのがむずかしい。</p> <p>C6: えっと一水を調整したり、乾燥をさせる強さも調整しとかないといけない。</p> <p>T: 水の調整な。</p> <p>C7: 背が高いから、たおれやすくて、たおれたら品質が悪くなる。</p> <p>T: 品質がわるくなる。</p> <p>C7: 稲が黄色くなる前に台風がきたら、だめになる。</p> <p>C8: えー。かみなりとか…天気。さけられないことって天気!</p> <p>C9: 倒れにくい稲を作るのが一番難しい。 (略)</p> <p>C10: 山田錦の方が100分の83取引されている。</p> <p>C11: 山田錦とコシヒカリを比べると、山田錦の方がたくさん取引されている。</p> <p>C12: もしかしやけどさ、山田錦とコシヒカリやと、山田錦の方がたくさんつくられているんじゃない。 (略)</p> <p>T: 食べるお米より山田錦の方がだんぜん多く育てているということがわかった。しかも、その山田錦はすごく難しい、つくるのが。 (略)</p>	<div data-bbox="815 264 1417 338" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>山田錦をつくっている農家の方にインタビュー 【資料1 インタビュー映像】</p> </div> <div data-bbox="831 349 1390 719" style="text-align: center;"> </div> <div data-bbox="922 730 1326 759" style="text-align: center;"> <p>【写真3】インタビュー映像後の板書</p> </div> <div data-bbox="815 786 1417 1039" style="text-align: center;"> </div> <div data-bbox="906 1055 1394 1115" style="text-align: center;"> <p>【資料2】JAみのり(加東市)における山田錦とコシヒカリの取引量の割合</p> </div> <p>C1~C9の子どもたちの発言で【資料1(映像)】から山田錦を作ることがとても難しく、農家の方は様々な工夫をして品質の良い山田錦を作ろうしていることが学級全体に認識された。そして、【資料2】から、山田錦はたくさんの農家で作られていることがわかった。しかし、子どもたちの意識の中に、山田錦農家の人々の苦労と山田錦の生産量が多いことへの矛盾が感じられていないようであった。その原因として【資料2】が子どもたちの思考にあっていなかったことが挙げられる。</p>
<div data-bbox="181 1518 1385 1581" style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>山田錦は、育てにくいのに、なぜ、多くの人育てているのだろう。</p> </div> <p>C13: 育てるのが難しいってことは、だめになりやすいから、だから多く育ててできるようにしている。</p> <p>C14: 作り置きをたくさんしておくため。</p> <p>C15: えっと。まあ。日本では、この辺がつくりやすいから、あの一他のところではすごく難しいから、あの一ここで作って日本中に広げる。</p> <p>T: わかる?むずかしいけどつくりやすい?</p> <p>C16: こころへんはな。ちょっとはまし。</p> <p>C17: 地形!</p> <p>C18: そんなに雪とかもふらへんし。</p>	<p>C15の子どもの「この辺りがつくりやすいから、ここでつくって日本中に広げる」という発言から、既習の学習事項や経験をもとに、C17の「地形!」や、C18の「そんなに雪とかもふらへんし」という加東市・三木市の地形や気候についての学習経験・生活経験を根拠に考える子どもの姿が見られた。</p> <p>C20の子どもの発言についても学習経験を根拠として発言することができている。</p>

T: 地形がつくりやすい。
 T: ほかどうですか。
 C19: ちょっと似ていて、コシヒカリよりもっと難しい米をつくって、日本中に広めたい。
 C20: えっとこの前、外国の20カ国にも売っているって言うっていたから、だから外国にも売するために大量生産している。
 C21: 世界中にひろめるため。
 T: 世界中に広めるため。んーなるほど。
 C22: つくりにくい場所で、簡単な米をつくって、つくりやすい場所で難しい米をつくる。
 C23: 雪とかも降りにくい。
 C24: その環境に適したお米を作っている。
 (略)
 C25: 山田錦の3等は、コシヒカリの1等より高い。
 C26: はい私は、やっぱり山田錦は育てるのが難しいから、高い。
 C27: はい私は、コシヒカリの1等と山田錦の1等を比べてみると、山田錦の方が5025円高い。
 C28: 同じや。
 C29: コシヒカリの1等の2倍くらいが山田錦の特等と同じ。
 T: 座った人は同じだった？
 C30: コシヒカリよりも育てるのが難しいから、コシヒカリよりも値段が高い。それでつりあっている。
 C31: 高級だからっていうだけなんちゃう？
 C32: 山田錦は高級！
 C33: 山田錦を買う人ってどういう人なん。
 C34: どういう人？やっぱり酒米を…違うわ。
 C35: 酒を造る人？
 T: お酒を造る人が買う。
 T: 高く売れるのは、育てるのが難しく苦勞しているからか。
 T: 山田錦が高く売れるのにはまだまだ秘密がありそうですね。

等級	コシヒカリの価格 (円/30kg)
1等	6,350円
2等	6,050円
3等	5,550円

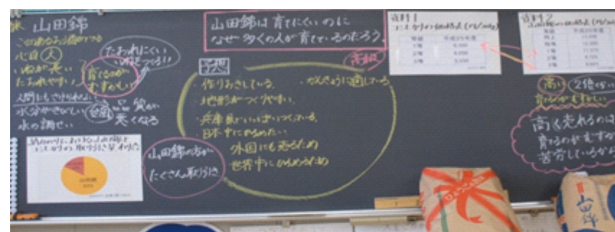
【資料3】 コシヒカリの価格表 (平成25年度)
 JAみのり提供

等級	山田錦の価格 (円/30kg)
特上	13,200円
特等	12,300円
1等	11,375円
2等	9,725円
3等	8,825円

【資料4】 山田錦の価格表 (平成25年度)
 JAみのり提供

【資料3】と【資料4】を根拠に考える場面では、C26の子どもの山田錦を育てる難しさと価格が関係しているという認識となった。【資料1 (映像)】の農家の人々の苦勞と価格が結びついている。

また、C31の子どもの山田錦がただ「高級」だから価格が高いのではないかという予想をもっている。しかし、ここで教師が、「高級なお米は何が違うのか」という切り返しができなかったために、子どもの認識が深まることがなかった。教師のコーディネートの重要性を感じる事例である。



【写真4】 本時の板書

る働きかけとなる。

また、山田錦製品以外の製品にも目を向けるように働きかけることによって、他の製品にも生活者がより品質のよいものを求めていること、それに応えようとする生産者、販売者が多くの努力をしているということを一一般化することができた。(森 清成)

3 読解力形成過程の分析と評価

3.1 学級全体の読解力形成過程

3.1.1 本時における読解力形成過程の分析

今回の実践は、子どもが日々見慣れている田んぼや山田錦ののぼりなどの写真をエンカウンターの手立てとして活用し、加東市や三木市では、普段食用のうち米ではなく、なぜ、酒米をつくっているのかという学習問題を設定している。山田錦は、全国の酒蔵から多くの需要

のある酒米であり、酒米の王様とも呼ばれている。山田錦の産地の中でも、加東市や三木市の山田錦は、特別に品質の良いとされる特A地区に指定され、国内一位の出荷量を誇っている。子どもは、この日本一の出荷量を誇る山田錦を生産している身近な地域にある特A地区の農家の仕事に焦点化している。その読解過程は、図1「なぜ山田錦(酒米)をつくるのか」の読解過程に示す通り、農家の人のインタビュー映像やJAみのり提供の価格表(コシヒカリと山田錦の比較)を根拠資料としている。子どもは、特A地区の地形や土壌、気候などの自然的条件の優位性、さらには、山田錦を生産することで安定した収入が得られることや山田錦のもつブランド価値や近年、日本酒の流通や販路が拡大していることで山田錦の需要が増えていることなど、社会的条件からも山田錦を生産する理由に迫っている。

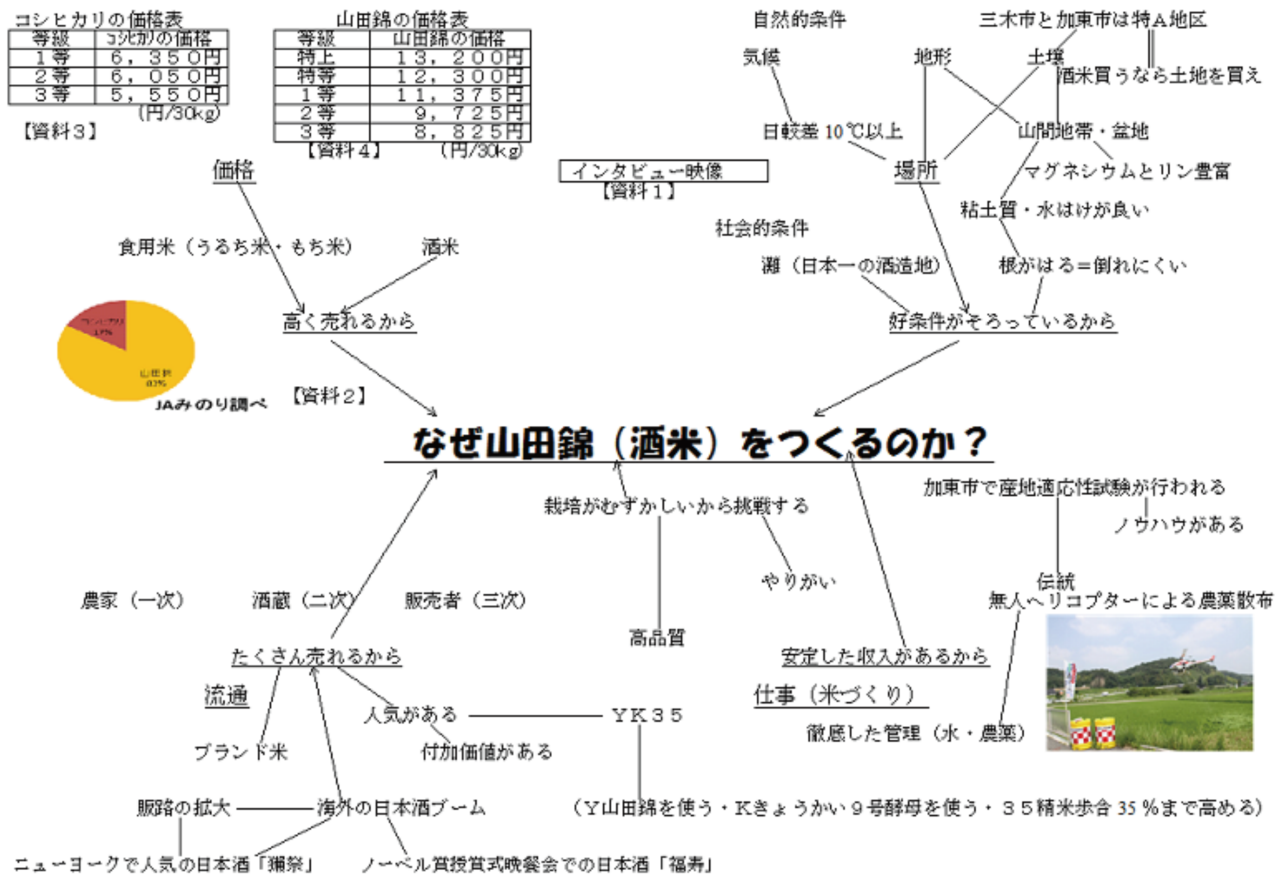


図1 「なぜ山田錦をつくるのか」の読解過程

3.1.2 本時における読解力形成と評価

山田錦は、食べるためのうるち米ではなく、お酒の原料となる酒米である。子どもは、近所の田んぼで作っているお米は、当然食べるためのお米を作っているのだと思込んでいるが、加東市の農家の人たちのほとんどが、酒米である山田錦をつくっている事実、なぜ、食用のお米を作らずに、酒米を作るのかという素朴な疑問に迫るのが本時の学習問題である。

本時まで、山田錦は、食用のうるち米ではなく、酒米で、うるち米の栽培に比べて、難しいとされている。特に山田錦は、ブランド米であり、水や農薬の管理など厳しく制限された中での栽培である事実を把握している。本時は、それなのに、なぜ、山田錦をつくっているのかを農家の人たちのインタビュー映像やコシヒカリと山田錦の取引価格(30kg当たりの取引価格)の比較表の資料をベースに読解を行っている。

関連する事実を正しく把握し、個々の事象を取り巻く関連事象を、可能な限り過不足なく捉え、全体の事象の関係性を明らかにして、理由を解明するのが社会科の目指すところである。しかし、本時では、取引価格がコシヒカリに比べて高いから山田錦を栽培するという事実関係を追究するのみに留まっている。そもそも、山田錦の取引価格がなぜ高いのか、高いのには理由がある。この取引価格が高い理由に迫らなければ、山田錦のもつごさや付加価値の読解は深まらない。授業者は、単元プランを構想する際に意図していたお米を生産するだけの学習ではなく、生産(第一次)→加工(第二次)→販売

(第三次)というフードシステムの流れの中でお米を捉え、海外での日本酒ブームや日本酒の新たな販売戦略といった今後の展開につなげ、山田錦をPRしたい意図があったはずである。農家の人の願いや工夫、努力を把握するというレベルに留まり、日本一の出荷量を誇る特A地区で栽培されている山田錦のすごさに迫れていないところに課題が残る。その原因は、根拠となる資料の不足と単元構成にある。地元加東市の特産品である山田錦を取り上げ、経験を引き出し、根拠に基づいて考える段階において、情報を解釈する部分が乏しく、安易に山田錦をPRしようで結実している。子どもの的確な読解を促し、科学的認識形成(理論的知識の習得・活用)を保証するには、教師による発問と資料のさらなる吟味が必要である。

(關 浩和)

3.2 学級及び抽出児の読解力形成結果

本節では、ワークシート(以下、シート)を手がかりに、学級及び抽出児の読解力形成結果を明らかにする。本研究では、子どもの読解力形成過程がたどれるように、シートに記入させ、ポートフォリオ的に保存した。シートから、子どもの記述内容を整理し、読解力形成過程の評価を行う。

3.2.1 学級全体の読解力形成結果

ここでは、シートに記入された内容をもとに学級全体(33名)における読解力形成の傾向を提示する。シートに記入された内容を、本研究の仮説に基づいて、社会科固有の読解力形成の方法である、情報の収集、情報の解

積, 推論の省察の3つの段階に分類し(表1), その形成過程を検討する。その結果, 本実践では推論の省察段階まで記述した子どもは見られなかった。しかし, 33名中18名が9回のシートへの記入のうち1回以上, 予想や仮説の設定に相当する内容である情報の解釈を記述していた。ただし, それがシートに残された割合は, シート提出のべ枚数225中33枚の約15%にとどまった。

表1 クラス全体の読解力形成状況
(1:情報の収集, 2:情報の解釈, X:記述無し, -:欠席)

No.	事前 山田錦について知っていること	1次1時(1/15) 山田錦の郷で分かったこと	1次2時(1/21) 山田錦とコシヒカリをくらべよう	2次4時(1/26) 山田錦の郷で分かったことの感想	2次5時(1/30) 山田錦を育てている方へのインタビュー	2次6時(2/9) 酒米の王様山田錦の学習で分かったこと	2次7時(2/18) なぜ山田錦が酒米の王様と呼ばれるのだろう	2次8時(2/20) 山田錦はなぜ量が半分になったのか	3次終了後(3/6) まとめ
1	1	1	1	1	1	-	-	1	1
2	1	-	1	1	2	-	-	-	1
3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	2	2	-	1	1	2	2	1	2
5	-	-	1	-	1	-	1	1	1
6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7	-	-	1	-	-	-	X	-	1
8	1	1	-	1	1	2	2	1	1
9	-	-	-	-	1	-	-	X	2
10	2	1	1	1	1	2	X	1	1
11	1	1	1	1	1	2	1	1	1
12	1	1	1	1	1	1	1	1	1
13	1	1	1	1	1	-	-	-	1
14	1	2	1	1	2	-	-	1	1
15	1	1	1	-	1	1	1	2	1
16	-	-	-	1	1	1	-	1	1
17	-	-	-	-	2	2	1	1	2
18	-	-	1	-	-	-	1	1	1
19	1	1	1	1	1	1	1	2	1
20	1	1	1	1	-	2	1	1	2
21	-	-	-	-	1	1	-	-	1
22	2	1	1	1	1	2	1	1	1
23	1	1	1	1	1	1	2	1	1
24	1	1	1	1	1	2	1	1	2
25	-	-	-	-	-	-	-	1	1
26	1	1	-	1	1	1	-	1	1
27	2	2	1	-	-	1	1	1	2
28	1	-	1	1	1	2	1	1	1
29	-	-	1	-	1	X	-	1	1
30	1	-	-	1	1	-	-	1	1
31	1	2	-	2	1	-	X	1	1
32	1	1	1	1	1	1	X	1	2
33	1	1	-	1	1	1	1	1	1

(子どもが書いたシートをもとに筆者作成)

3.2.2 抽出児の読解力成長と社会認識形成との関係

ここでは読解力が形成され, 社会認識が比較的良好に育っていると考えられる子どもの記述を取り上げる(表2)。そして, 社会科固有の読解力形成の方法である, 情報の収集, 情報の解釈, 推論の省察の3段階に分類¹⁾し, その形成過程を検討したところ, 聞き取り, 資料, 授業での教師および子ども同士の話し合いによる情報の収集, 仮説設定による情報の解釈を行っていることがわかった。しかし, 情報の解釈において, 山田錦を作っている農家

が, 自然および社会環境を活かしていることや, 社会環境の変化の中, 山田錦を作り続けていくのはなぜなのかという中心的な学習問題に対する記述が少ないことが分かった。

3.2.3 読解力形成に関する評価

シート記述の分析から二つの問題点が読み取れた。第1は, 推論の省察段階の記述が見られなかったこと, および情報の解釈段階の記述も少なかったことである。これは, 第3学年という学年の特性上, また, 単元目標が「資料から情報を読み取ること」や「予想や考えを表現すること」という段階に設定されていたためであろう。第2は, 中心的な学習問題に関する記述が少ない点である。本実践で使用したシートには, 記入内容への指示がなかったため, まさに子どもの自由記述をもとに分析をすることになった。そのため, シートには推論したことや考えたプロセスの記述がほとんどされなかった。これまでの一連の研究においても, シート記入の際に意図的に記入させる手立ての必要性を指摘してきたが, 今後も研究チームにおける連携が強く求められる。具体的には, ①今日の学習で知ったことわかったこと。②知ったことわかったことによって予想や考えがどのように変わったか。③新たに浮かんだ疑問。という3項目にして, 意図的に知るとわかるを峻別したり, 予想を仮説に持ち上げる時の話形を指導したりすることで, 情報の収集, 情報の解釈, 推論の省察が読み取りやすくなると考えられる。

表2 I.K 児のワークシート記述内容

次時	読解力形成のための方法 (情報の収集:破線, 情報の解釈:実線)
事前	自分で思ったこと:加東市の山田錦の原料の米はここで作っている。よって近くにいる人に知らせて, <u>山田錦を有名にするためだ</u> と思う。JAグループ兵庫が旗を作っている。JAグループの人が山田錦の米を作っていることを知ってもっとみんなに知らせるために旗を立てたんだと思う。 <u>おうちの人から:全国の日本酒のほとんどが山田錦を原料としているらしい。稲の栽培が非常に難しいらしい。</u>
1 1	私が山田錦の郷に行って一番びっくりしたことは食用米と酒米山田錦の稲の長さです。はじめは長さなんて全く気にしてなかったけど, 一度聞くとずっと頭に残っていました。聞いたときにどうして酒米山田錦のほうが長い?と思いました。 <u>それはきっと育てる時期や育て方がちがうからだ</u> と思います。他にも, 自分が質問したことや, 試食など, いろいろあって楽しかったです。今後の山田錦の学習が楽しみです。また山田錦の郷に行きたいです。そして次行く時にはもっと成長していきたいです。
2	<u>分かったこと:山田錦の米は心白や米粒が大きい。いねも普通のいねより長い。山田錦は特別な米だ</u> ということがわかった。 <u>ふしぎに思ったこと:山田錦はだれがさいしょに作ったのか</u> 知りたい。そして, その人はどうやってつくったのかを知りたい。
2 4	<u>たおれにくいいねを作るのがたいへん。すぐにこける。いねが黄色くなるころ台風が来る。苦勞するところがたくさんある。山田錦の方がコシヒカリより育てるのがむずかしいのに, コシヒカリより山田錦をつくっている。</u>

5	<u>コシヒカリの1等の2倍くらいが山田錦の特等くらい。</u>
6	<u>思ったこと：場所に関係があると思う。理由は北海道でつくっているのを見たことがないから。しりょうから分かったこと：たねまきとしゅうかくの時期の気温を見ると5度以上高いことから山田錦を育てるには気温が高い方がいい。ビデオを見て分かったこと：兵庫県は山田錦をつくるのにいい所で、とても品質がいいのもっと品質のいい酒を造ろうとするとところがすごいと思った。</u> 山田錦は水路から始まる(ママ)。自分の考えを出せてよかった。はやくめあての結果を知りたい。
7	<u>2005年が一番高い者が多いから、そこからどんどんやめはじめています。だからどんどん少なくなっている。</u>
8	<u>コシヒカリよりももっとむずかしい米を作りたいと思っ</u> <u>て日本中(世界中)に広めるため。</u>
3 終了後	<u>いねが長い。こめつぶが大きい。心白が大きい。特等が</u> <u>一番よく売れる。たおれにくいいいねをつくるのがむずか</u> <u>しい。2005年の時が一番高い者が多いからどんどんつ</u> <u>くるのをやめ始めている。1994年が一番出荷量が多くて、</u> <u>2011年が一番出荷量が少ない。その差は約半分。でも出</u> <u>荷量は2013年から2014年にかけてまた増えている。2013</u> <u>年と2014年で出荷量が増えているのは、多分2014年と</u> <u>2013年が日本酒に関する条例が作られたからだと思う。</u> 山田錦は、たくさん人の苦勞があつて、とてもいい品 しつもののができています。だから、パンやせんべいなど、 いろんな商品が生み出されているんだと思う。

(子どもが書いたシートをもとに筆者作成)
(吉水裕也)

3.3 読解力形成のための授業構成と評価

学習指導要領での本単元の認識内容は大きく次の二つ(細分すれば四つ)からなる。第一は、地域には生産に関する仕事があり、自分たちの生活を支えていること、第二は地域の人々の生産に見られる仕事の特色及び他地域との関わりである。また、認識方法については、小学校社会に共通する方法として、見学や観察・調査活動を位置付けている。これを本実践に当て嵌めると、①加東市一帯には山田錦を栽培する農家があり、②日本酒造りに欠かせない酒米を生産することで我々の生活を支えている、③山田錦はうるち米に比べて育てにくい農家の人々は工夫して育てており、④他府県にも移出され山田錦は酒米の王様と称されていることを、子ども各自の家庭等での聴き取りの他、「山田錦の郷」の見学・調査、映像資料(山田錦農家の苦勞、酒蔵へのインタビュー)等の観察・読解、うるち米と酒米の食べ比べを通して学習している。その意味で、学習指導要領に示された内容・方法とともに満たした実践と評価することができる。

次に、授業構成の点ではどうだろうか。単元の全体は、第1次：問題設定(経験を引き出す)、第2次：問題の追究(根拠を明確にする)、第3次：一般化(現実社会につなげる)という論理で構成されるが、第3次の位置付けにやや違和感が残る。地域の農家の仕事で一般化を図るのならば、山田錦栽培だけでなくブドウやモモ等の果樹や野菜の栽培農家の仕事も取り上げねばならないし、米づくり農家の仕事の一般化を図るのであれば、北海道

から九州まで日本各地の米作の工夫を取り上げて、比較・対照する必要がある。だが、本単元では山田錦を酒米の生産という農家の仕事としてだけでなく、うどん・まんじゅう・ジェラート等の加工食品の製造・販売の仕事や、それを消費する生活者のニーズにまで視野を拡大し、「生産者・販売者・生活者がともによりよい物をつくるために努力している」という一般化に結びつけている。これはこれで社会の見方としては重要であるが、本単元の目標「一次生産者は、二次生産者や生活者との信頼関係を大切にし、気候・地形・土壌等の地域の特性を活かし、質の高い品物をつくるために工夫や努力をしている」とは微妙にずれている。なぜなら、目標の文言は仕事一般ではなく、あくまで一次生産者＝農家の仕事の一般化を意味するからである。

授業者がこのような混同を招いた理由は、農家ではなく山田錦を主役にしてしまった点にある。農家にとって一番重要なのは、山田錦が多様な商品になって消費者に喜ばれることではない。無論、農家の年寄りにインタビューすれば、そうした思いを述べる人もいよう。それが小学生の学習のためだとわかれば尚更である。だが、農業で生計を立てようとする青壮年営農者ならば、米が少しでも高値で安定して売れることが一番の願いであるに違いない。そのためにさまざまな工夫をし努力もするのだが、現実には決して楽観視できないのである。例えば、酒米農家と酒蔵との関係も単なる信頼ではなく契約に基づいており、双方に利益があるからこそ成り立つものと捉えないと社会科の認識にはなり得ない。授業者が第3次のねらいとした「現実社会につなげる」というのは、この農家の現実に触れさせることであり、山田錦のPRポスターを作成することではなからう。

しかし、対象はあくまで小学校3学年の子どもである。地域の誇る山田錦をさらにアピールしたい、させたいというのも十分納得できる。そのためには授業構成をどう変換すればよいのだろうか。まず、第1次においてポスターの作成を活動目標に掲げることである。つまり、地域で山田錦が生産されており、それが酒米の王様と言われることを学んだ後に、「山田錦のみみつをポスターにして全国にPRしよう」という目標を設定するのである。要するにポスターづくりをインセンティブにして、山田錦のみみつをさぐる課題意識を醸成するのである。続く第2次は本単元の主発問を追究する場面であり、構成を変える必要はない。だが、第3次は前記のように現状の課題認識と今後の展望に変換しなければならない。

以上の単元構成を定式化すれば、次のようにならう。

- I. 現状認識と問題の発見：加東市一帯の農家は田圃で何を生産しているのか？
- II. 問題の分析・追究：なぜ酒米を生産するのか？
- III. 未来予測・価値判断：今後の酒米づくりはどうなるか？人々はどう対処すべきか？

これらを踏まえて、山田錦のみみつをポスターにまとめて展示させれば、違和感のない展開になったのではないだろうか。ただし、授業者は本単元の前に二つの単元

「お店の工夫を見つけよう」と「K農園の農作物の工夫を見つけよう」を実践し、本単元と併せて一つの大単元を構想していたと見られる。そのため、本単元の目標にも意識的か無意識かはともかく、大単元としての目標を位置付けたものと解される。したがって、授業者や子どもには私のような違和感はなかったのかもしれない。だが、仮にそのことを斟酌したとしても、本単元はそれ自体として完結させた上で、大単元としてのまとめを行うべきであったといえよう。(原田智仁)

4 小括—成果と課題—

本単元の実践では、地域の農家の仕事として酒米「山田錦」づくりを取り上げ、山田錦の秘密を探るべく活発な追究を展開した。その結果、地域の自然的条件（気候、土壌等）と社会的条件（酒造地の灘との近接性、食用米と比べた価格の優位性）に秘密を解く鍵があることを子どもの多くが読解した。そして、学習成果をポスターにして「山田錦の郷」に展示し、社会に向けて発信することができた。そうした点で、授業者にとっても子どもにとっても有意義な単元であったと評価される。

他方で課題も指摘された。第一は、第2次の問題追究場面の弱さである。すなわち、山田錦のブランドを成立させている理由を十分に追究させることができなかったことである。その原因には、根拠となる資料の不足と、山田錦の追究よりもPRを優先する単元構成が挙げられた。第二は、読解力を評価する手立ての弱さである。本実践では単元の前後と毎時間終了後に「わかったこと」をワークシートに記述させたが、指示の方法が明確でなかったために、情報の収集—情報の解釈—推論の省察という読解力の成長過程を評価できなかったことである。第三は、第3次の位置付けである。山田錦の栽培農家の工夫や努力を追究していけば、当然課題も見えてくる。その課題に農家はどうか対処しているのか、あるいはこれから対処すべきかを考えることなく、山田錦のPRポスターづくりに走ってしまったことである。これらの課題のうち、評価の手立てなど取り扱う主題に左右されないものについては次年度に改善を図りたい。

最後に、本共同研究のあり方について反省を述べる。上に指摘した課題は、いずれも実践に先立つ単元開発の時点で話し合いを深めれば、十分に調整・解決できたはずである。無論、授業者の思いや願いは、尊重されねばならないが、基本的な単元構成や評価方法、教材選択についてはそれほど意見が対立するとは思えない。つまり、チームとしての話し合いが不十分なまま見切り発車された実践を、後から分析・批判しているというのが実態である。大学法人化後の教員の多忙化は大学も附属学校も変わらないため、お互いに言い訳は可能であるが、共同研究のさらなる発展を考えるならば、何らかの打開策を講じる必要があろう。自戒の弁である。

他方、多忙さの時期も程度も異なる大学の教員と附属学校の教員とが、過度に拘束し合うことなく共同研究を継続していこうとすれば、現状の方法も次善の策として

やむを得ないかもしれない。現に我々は、そう考えて本共同研究を推進し、未熟ながらも毎年成果を公表してきた。継続研究でありながら、実践事例が変わるだけで方法論的な深まりに欠けるのはそのせいである。勿論、それを良とするわけではないが、本研究は、学校種を越えた研究者や教員の継続的共同研究のあり方についても問題提起していることを付言しておきたい。

(原田智仁)

【註及び参考文献】

- ¹¹ 読解力に関するPISAの定義も我々の考え方も大きく違っていない。特にPISAの「熟考・評価」を「推論の省察」としているのは、社会科として必要なのは単なる熟考ではなく推論だからである。また、適正な自己評価のためにも省察が必要なることを考えると、両者は決して矛盾してはいない。
- ・兵庫酒米研究グループ編『山田錦物語—人と風土が育てた日本一の酒米—』神戸新聞総合出版センター、2010年。
 - ・『兵庫のすがた2014』兵庫県企画県民部、2014年。